

2006. 12. 24

絶望～ 武満 徹「海へ」

現代においては、「絶望」というものが許されていないし、本当の意味で、それを口にする者など居ない。あるいは、かつてそのように呼ばれていたものは、現代では、「不要なもの」としてごく普通にそこいらに打ち棄てられていて、それを口にすることなど陳腐極まりないことなのだ、とも言えるだろう。

毎日のように線路に飛び降りて自殺する中高年者。いじめに耐えかねて命を絶つ中学生。彼らは、絶望を許されなかった者たちであつたに違いない——。それは「ありえない」ものとして認識されてしまっていないだろうか。

人間自身の許容力、包容力——そういうものが不要とされている、もしくは、その範囲が狭められている、そのことの裏返しとして、「絶望」は許されていない。あらゆるものが法律や制度によって「規定」されつつある現代社会においては、そこに規定されていないものは排除されてしまわれなければならぬもの、なのだ。

現代における自殺者たちは、絶望という「無規定」なものに戸惑い、周囲からも無視されながら孤立した挙句、この世界を棄てざるを得なかった者たちなのではないだろうか。いや、自殺者だけではない。生ける我々にも、「絶望」は許されていない。我々が作り上げてきた外部生命体たる社会や制度は、それを許さない。我々は、何のためにそれを創造してきたのだろう。我々自身が何ら反芻することなく、迷い無く、生き抜くため、であろうか……。

この曲は、絶望とは無関係かもしれない。しかし、現代において許されていない、ある種の感情を表している、と聞こえる。

アルト・フルートのくぐもった、まるで海原の波やうねりのような響きと、ギターやハーブなどの慄えるような音の真珠——、それらが共振することによって生まれる微かな風……。その世界の中に、私は「絶望」が、石ころのように打ち棄てられ、転がっているのを見る。その石ころをなめらかに円く削り、やさしく慰めているのは、無言の海だけなのだ。